

再び、偉人は市井に

3月11日。あの大津波のとき、あたかも増水した河が狂奔して、以前は町並みであった所を怒濤のように流れ荒れ狂っている。小高い高台からそれを眺めていた女性が、堪りかねて傍らの人の肩にすがって泣き崩れた。周囲にいた男性の一人が、「泣くな！子供だっているんだから、泣くんじゃない！・・・まだ決まったわけじゃないんだから。」・・・さすがに泣きやんだが、この気丈な男性もあまりの奔流に、絶望を噛み締めていただろうに・・・

子供たちを実家のある関西に航空機で連れてきたおかあさん。「とりあえずの心配をなくして、ワタシは便を探して戻ります。」また、同じように子供たちを連れて帰ってきたおかあさん。「みんなを見捨ててきたようで・・・」と泣き崩れた。

「その女性の勇気は、海外でも複数のメディアで広く称えられた。」と週刊新潮で報道された、宮城県南三陸町の24歳の遠藤美希さん。防災放送のアナウンスを津波が到達するまで続けていた。「6メートル強の津波警報が出ています。早く避難してくださいっ！」を繰り返し、繰り返し放送した。この放送によって数千人の町民が助かつ

たという。放送が途切れる直前、「アッ」という彼女の声を多くの人
が聞いたという。危機管理課に勤務していたのだが、最期まで自ら
の職務に忠実に仕事を完遂した。……4月、彼女のおかあさんが
インタビューに答えてハンカチで時々涙を拭いながら、9月に挙式
する予定でしたが、まだ遺体がみつからないからこの町を離れ
ることができない。避難所では号泣することも泣くこともできない。
5月1日になってようやく彼女の遺体と判断された。彼女の父上が、
「せめて10分でもあれば助かっていたのに……」と嘆く。

消防隊も消防団員も、海岸の人に急を知らせに行って車に乗せて
往復し、最後に向かったきり帰らなかったり、町民の避難を優先さ
せて命を落とした人も数多くいる。大槌町では、越田富士夫さんは、
消防車に乗れといわれてもてを顔の前で振って“乗らない”と意志
を表現しさらに掌を前に出して“行け”。……後輩に「早くお前も
逃げろ」と指示した。停電でサイレンが鳴らないから屋上の半鐘を
鳴らし続け……

あるいは桜井歩さんは、拡声器で「高台に避難してください！」
と叫び続け、翌日横転した消防車の助手席で遺体がみつかったが、
拡声器は手に持ったままだった。……このような話は枚挙に暇

がないくらいあちこちで見かけられた光景だったらしい。

警察官も同じである。海岸と高台をパトカーで何往復もしたり、結局は津波に巻き込まれてしまった警官もいる。仙台の交番勤務の渡辺武彦巡查部長は、交差点に仁王立ちになって安全な方向を指示していた。背中から津波が襲ってくるのを知りながら、最期まで避難誘導を仕切っていた、という。最後に目が合った人の話では、覚悟を決めていたように見えたという。……これを青山繁晴さんが報告しながら、硫黄島で、応援部隊が来ないことがわかっていながら祖国のために玉砕した栗林中将ら兵士とだぶらせて、声涙ともに下る表現をした。自らの命を投げ出して将来の日本に夢を託して職務を遂行して散って行った。

公務員もそうだが、教師も子供を見捨てて逃げ出すわけがない。病院のスタッフも、患者を見捨てて自分だけ逃げるわけにはいかない。福島県知事が、「患者を見捨てて逃げだすとは許し難い！」と言ったらしいが、そんな判断ができる状態にいたはずがない。

みんな壮絶な殉職なのである。現地では、このような話が後世まで語り継がれるはずだし、また語り続けなければならない。……小生のまわりにも、16年前の阪神大震災の経験を今でも1時間でも

2時間でも語り続けることができる人が数多くいるのである。

原子力発電所でも、目に見えない放射能と戦いおののきながら自らの職務に邁進した（あるいは現在でも続行している）勇敢な名もなき勇者の話が聞こえてくる。（「原発」については、稿を改める。）

さて、ここまでは、大地震発生とそれに続く大津波の際にみられたものであるが、その後の復興・回復・支援物資の運搬、瓦礫の撤去、遺体の収容など、獅子奮迅の活躍をしたのが自衛隊である。・・・普段自衛隊を**なぜか**目の敵にしてきた連中の声が聞こえてこない。ボクに言わせれば、「これでも自衛隊は不必要ですか？」都合のいいときだけ散々利用して、今回のことが落ち着いたら、やっぱり「自衛隊無用論」が台頭してきて、自衛隊員の士気を失わしめるような連中がのさばってくるのだらうな。仙谷とか菅とかを初めとする「中身の無い空虚な思いつきを言い放つだけで邪魔にしかならない連中のいかに多いことか！」 これでも自衛隊の予算を削り、人員削減を本気で考えているのだらうか。とくに陸上自衛隊の瓦礫の処理にあたってのきめ細かな配慮に、涙した人は数え切れない。ずっと自宅のあった場所で黙々と丁寧に瓦礫を取り除いていた隊員に向かって「もう、家族の捜索はあきらめます。ここまでして下さったらこ

こにはいないのだろう」と感謝したところ、隊員が「職務ですから」と事も無げに答えたという。この手の話は随所で聞かれたらしい。実際に現地へ行った人の話では、時期にもよるが、遺体があるのはわかっているのだが、とりあえず、生存者の捜索が優先されたり支援物資の配布に忙殺され、放置されているようなことがいくらでもあったという。TV では決して放映しない光景である。見渡す限り瓦礫の山で、これをどうやって撤去するのだろう。海上自衛隊は、引き波によって海に流された遺体の収容に、アクアリングを使って捜索するのだが、もっと沖に流された人も数え切れないだろう。それでも数百人の遺体を収容したが、幼児などの場合、隊員は涙ながらに職務を遂行するという。・・・疲労のピークなどとっくに過ぎている。日本中からボランティアも駆けつけるのだが、あまりにも被害が甚大すぎてどこから手をつけていいのかさえ見当もつかない。政府もその無能ぶりを露呈し、原発ばかりに気をとられてしまって、その他の被災者の救援にまで手がまわらない。なんのために国家公務員を数え切れないほど抱えているのだ。もうすぐ3ヶ月になるのに、今もって避難所で集団生活をしている人が10万人単位でいる。当初からそうだったのだが、あまりにも反応が遅すぎて、イライラ

するばかりである。

ラジオやテレビで臆面もなく自衛隊を否定する連中が多いのだが、さすがに今は静かにしている。・・・「国防」を考えたとき、自らの国を守る人間がいないことがなんら不自然だと思わないのだろうか。これでは、世界中から「平和ボケ」と言われてもしかたがない。他の国では、「日本ではなぜ原発を軍隊が警護しないのか？」と不思議がられているのである。

それはともかく、被災地の子供たちがよく知っている、自衛隊がどれほどの貢献をしたか。「大きくなったら自衛隊に入隊する」と宣言する子供たちがどれほど多かったことだろう。いい年をして「反自衛隊」などとそうでなくても節電しようとしている時、電気を使って言っていたら、「何の役にもたたないのが、・・・」と、そのうち子供たちに軽蔑されるようになるのではないか。

NHK など自衛隊の活躍をあたかもなかったかのように無視して放映しない。偏向報道以外のなにものでもないのだが、忘れた頃に特集のようなことでお茶を濁す。中国人民解放軍はよく報道されるのだが。まともな人は受信料をはらわないだろう。きわめて当然の反応だと思う。

2011.05.30.